

「今日も学校かあ。」

中学校に入学して、数か月が過ぎようとしています。今日もいつもと同じような朝を迎え、服を体操服に着替え、学校に行く準備をします。

「早くご飯を食べなさい。」

「忘れ物はないの。」

「宿題はちゃんとやったの。」

いつもそんなことばかり言ってくる母に、

「わかっているよ。うるさいなあ。」

朝からとてもいやな気分。目も合わさずに朝ご飯を食べる私は、ぶつきたらぼうに言いました。

昨日の夜もこんな会話をしたのを思い出しました。

「いつまでもスマホばかり触っていないで、ご飯を食べて早く宿題をやりなさい。」

そう言われて、

「はい。」

と、気のない返事をして、夜ご飯を食べました。昨日のメニューは麻婆豆腐。よく作るレパートリーで、私にとっては、慣れ親しんだ味です。いつものようにテレビを見ながら、母と食事をしました。

会話も、たぶんしたとは思いますが、どんな内容か覚えていないくらい、普通の日常でした。

学校では、中間テストも経験し、初めて学習する中学校の内容に苦労しました。また、部活動も始まりました。バレーボール部に入部した私は、基本の練習を一生懸命取り組んでいます。いろいろ不

安もあり、すべてがうまくいくわけではないですが、そんな中でも友達ができ、中学校生活にも慣れてきて、これからの生活に期待をもつて、頑張っていると思つた矢先、学校の血液検査で異常が見つかりました。その知らせを聞いた時はただの軽い貧血で、薬を飲めば治るだろうと軽く考えていました。近所の病院に行き、結果を聞くと、重度の貧血だと言われました。念のため、大きい病院を紹介され、何日も詳しい検査をしました。重い病気がかりが頭の中をよぎり、とても心配でした。原因がなかなかわからず、ちょうど、期末テスト期間の一週間入院することになり、コロナで付き添ってもらうこともできず、一人寂しさと不安と緊張の中、CT、MR、MRI、骨髄、血液等の検査を受けました。検査前は飲食の制限があり、飲み物も飲めずとても辛い思いをしました。自分の体が機械を通してたくさん調べられて、何が何だかわかりませんでした。いつになったら終わるのか、本当に治るのか、先も見えない不安に襲われていました。そして一番辛かったことは、それを相談する相手がないことです。

検査の結果、おなかに“しゅよう”ができていて疑いがあるとわかりました。不安で押しつぶされそうなおなか、紹介された大学病院にすぐに行きました。そのまま入院となりましたが、この大学病院は、付き添いができる病院で少しほっとしました。より詳しい検査をするとお腹に五センチの“しゅよう”ができてることがわかりました。そして、手術をすることが決まりました。

母は、病室で私の服などを整頓しながら、

「きつと大丈夫だから、早くよくなるうね。」

と言ってくれました。母は、付き添いはできるといつても、時間は決まっているため、帰らなければなりません。母が帰ったあとの病室は、二人部屋ではあったものの、とてもひっそりとしていて、一気にさみしさがこみ上げてきました。

手術の日までは特に何もすることがなく、怖くて、一人不安な毎日

を過ごしていました。入院中、病室には同じ年頃の子がいなかった
ので、話すこともできませんでした。そんな時、看護師さんやお医
者さんが何度も部屋に来てくれて、

「部活は何に入っているの。」

「どんな映画を見るの。」

「最近は何がはやっているの。」

など、たくさんさんの言葉をかけてくれてうれしい気分になり、さみし
い気持ちもまぎれました。

隣のベッドに一歳半の女の子が入院していました。お母さん
は夜も寝る暇がなく、疲れて泣いていました。その時に看護師さん
が来て、

「大変だから子供あずかるね。お母さんはゆっくり休んでください。

一人で悩まず、困ったら言ってください。」

と言葉をかけていました。看護師さんの優しさと、看病するお母さ
んへの気づかいに感動しました。

手術当日、熱が出たり急患が入ったりした場合は、手術が延期に
なると聞いていたため、手術が怖くて、一日でも手術が遅れるとい
いなと心の中で思いました。でも、遅れると不安な日々も続いてい
くので、早く終わってほしいという気持ちと葛藤していました。看
護師さんに

「大丈夫。」

と聞かれましたが、

「大丈夫。」

と強がって答えました。でも、本当は緊張と不安でいっぱいでした。

手術室に入りました。ライト、器具がたくさん並び、ひんやりした
ベッドに横になったとき、とても怖かったです。でも、以前から知
っていた先生が手術室に入ってきて、私に、

「やっほー。」

と声をかけ、私の不安をやわらげてくれました。麻酔をする前、無

事に手術は終わるのかな、痛くないかなとたくさんのことを考えま
した。同時に、家族や友達の顔が頭に思い浮かびました。

目が覚めたら、病室のベッドの上でした。傷の痛みとおう吐で、痛
み止めが効かず、三日間気を失うほどのつらさでした。

四日目から徐々に回復し、少しずつですが、歩くこともでき、ご
飯も食べられるようになりました。でも、最初にやっとの思いで食
べられたのはヨーグルトです。早く普通のご飯が食べたい、みんな
は何をしているのかな、勉強どれだけ進んだかな。当たり前のこと
ができないことと、友達とは違う自分に、焦りや心配ばかりを感じ
ていました。

だいぶ体調も回復してきて、病理検査の結果が出たと聞いたので、
母と一緒に聞きました。悪性リンパ腫とキャスルマン病という難
病の二つの疑いがありました。どちらともあてはまらず、いい結
果がもらえました。この難病だったかもしれないと想像すると怖く
てたまりません。

八日目に退院することができました。退院日、やっとな退院かと思
い、久しぶりに家族そろって楽しい会話をしながら、ご飯を食べま
した。手術前、不安な気持ちを話すことができなかったぶん、いつ
もの何気ない会話のありがたさに気づきました。いつもよりごはん
がおいしく感じ、とてもうれしかったです。普通のご飯がこんなに
おいしいのか、と思いました。そして、家族そろってご飯を食べる
ことは当たり前ではないのだと思いました。みんなでご飯を食べら
れるのは、とても幸せです。

この二十四日間、学校も休みがちで部活に行くこともできず、授
業も遅れてしまい、また、つらいこともたくさんありました。でも
この経験の中で、たくさんさんの人のやさしさに触れ、当たり前の大切
さにも気づきました。家族みんなと一緒にいることは当たり前では
ないのだと身をもって実感しました。学校の血液検査をしなかつた
ら、症状が出なかつたので、今までわからなかつたと思います。こ

れからは、この経験で学んだことを忘れず、一日一日勉強、部活を頑張りたいと思います。そして、病院の先生、看護師さん、学校の先生、友達、家族、私を知っているみんなが、自分のために見守ってくれて、心からありがとうという気持ちでいっぱいです。

3・9

つらさを乗り越えて、当たり前前の大切さに気づくことができました。優月さんと、優月さんを支えてくれる人たちの当たり前前の毎日が、これからも続いていくことを願っています。

(指導 丹羽明音)